

惶 懼 鬱 色 頽 遮 吁 離 凶 慰 毒 怪 感 罹已上

〔書言字考節用集八言辭〕憂 惻 憫 愴 患 愁

〔倭訓栞前編四〕うれふ 憂患をいふ、うれはしともいへり、はし反ひ也、三代實錄に憂禮比と見ゆ、

古今集にうれはしきこと、よめり、詩經に吁をよみ、新撰字鏡に忡もよめり、

うれたき。日本紀に慨字をよめり、憂痛きの訓義成べし、古事記、万葉集、伊勢物語などによめる

皆同じ、源氏に、いとつらくもうれたくも覺ゆるといへり、

〔新撰字鏡小〕惻 於縁反、平、憂貌、伊支。 憫 同連字、佛惻、意不舒泄也、

〔類聚名義抄六〕怛 音邑、憂、ナケク、 忱 懔、上俗下正、苦、黨反、懔、概、失、

ル、 慰 惻、音測、子タム、 懔 懔、音鏡、ナケク、子

〔古事記傳三十三〕伊岐杵本流とは、後世には、たゞ心の怒をのみいへど、怒を云のみには非ず、此も

怛字の意なり、怛は字書に不安也とも、憂也とも注せり、

〔倭訓栞前編四〕うらぶれ。楚辭の怵々をかく點せり、憂貌と注せり、万葉集に、於君戀之奈要浦觸

と見えたり、古今集にうらびれとも見ゆ、うら反わ也、ぶれを約ればべとなるを、同音のびに轉ず

ればわびに同じといへり、されどうらは心をいひ、ふれはあふれるの略、溢の義なるべし、公任卿

の説に、物思ひくるしげなる意也といへり、

〔古事記上〕於是大國主神愁而告吾獨何能得作此國、孰神與吾能相作此國耶、

〔日本書紀三〕武、戊午年五月癸酉、軍至茅渟、山城水門亦名山井水門、時五瀬命矢瘡痛甚、乃撫劔而雄

誥之曰、〇註 慨哉、大丈夫、慨哉此云、于、黎多棄伽夜、被傷於虜手、將不報而死耶、

〔日本書紀垂六〕五年十月己卯、朔、天皇幸來目略中、皇后略中、略 奏曰、〇中 告言則亡兄王、不言則傾社

稷是以一則以懼、一則以悲、俯仰嗵咽、進退而血泣、日夜懷悞、無所訴言、